

## 著述家と史料の収集・管理について

保阪 正康

### 1. はじめに

ご紹介に預かりました私保阪正康と申します。いろんな肩書きがつくんですが、昭和史を題材にして、題材にしてといいますと不見識かもしれませんが、昭和史に関心を持って次の世代に伝えたいという思いで、評論・評伝・ノンフィクションいろいろな形で作品を書いております。今日は著述家として史料をどう考えているか、史料をどう集めているか、そしてそれをどう管理をしているのか、ということについてお話をしたいと思います。

私の基本的な立場は、政治的あるいは宗教的立場に立つのではなく、つまり演繹的に歴史を見るのではなく、いろんな史実を検証しながら帰納的に下から見ていくことで何か教訓を得ようと、私たちがどのような教訓を学ぶかは別にしまして、教訓化して次の世代に伝えていこうというような考えを持って、昭和史を検証することを自らに課してきました。

そういうなかで史料についてどういうふうに考えてきたかを今日はお話をさせていただきたいと思うのですが、1時間ほどですのでいきなり具体的な話から入りたいと思います。

### 2. 私にとって史料とは何か

私は今、実は67才ですが、戦後の昭和21年に小学校に入りました。そのときはまだ国民学校とっておりました。同世代のものとはすぐ話が通じるのですが、最初に習ったのは、カタカナで先生が黒板に「ミンシュシュギ」というのを書いたのを記憶しています。「あなたたちは民主主義の子だ」と。21年の4月ですから、7、8ヵ月前までは、僕たちより1年上の人達は、皇国少年としての教育を受けていた、あるいは歴代天皇の名を正確に覚えることを要求されていた、あるいは軍人勅諭をなぞることを教育として受けていた。私たちはそういうものを一切否定されたところから出発しました。いわゆる民主主義というものが手探りで始まったのだと思います。そういう世代ということで、私としては戦後民主主義の第1期生じゃないかという言葉で語ることもあるのですが、要するに戦後民主主義という空間の中で育ってきた世代、という

意味です。必ずしもそれが客観性を持ちえたかは別です。ちょうど昭和20、30、40年代というのは、極めて熾烈な東西冷戦下にあります、当然ながら歴史解釈というものも、ある種の演繹的な手法で行われていたと思います。むろん私自身もそういった書物に触れてきて、歴史というものはそういうものだ、科学である、というような理解をしてきました。

私が今取り組んでいるのは、そういった演繹的な手法ではなく、帰納的に、なぜああいう昭和の前期のような時代があったのだろうか、なぜ我々の国は戦争という選択をしたのだろうか、そこでどのような過ちを犯したのだろうか、というようなことをやはり確認していくことが、戦後民主主義の世代の果たさなければならない役割ではないかという理解をしています。

くり返しになるかもしれませんが、昭和40年代の終わりから50年代の初めごろまで、私は30代から4代になっていたんですけども、それまで昭和史を先ほど言いましたように演繹的に考えていました。つまり、単純に言うと唯物史観的な発想ですね（歴史というのはあるひとつの方向へ科学的な枠組みの中で動くという理解、もちろん私は今もそういう考え方があるということを否定するわけではありませんけども）。

そのころ編集者でしたが、どうも現実に社会の中でいろんな人の話を聞くと、たとえば、社会党の情熱的に社会主義を主張する代議士の話を聞いていたら、今日は戦友会で軍歌を歌うんだといって嬉々として喜んでいる。その精神構造は何なんだろうと。私のいた出版社は 音の出る雑誌 を作っていた朝日ソノラマというところなんですけども、政治ものの専門ではなかったのですが、政治家の発言集などを出していたものですから、そういう出会いがよくありました。自民党の代議士のところに行くと、自民党の代議士の方がですね、二度とあんな戦争はこりごりだ、憲法は絶対守らなければいけない、というような。その自民党と社会党を分けている境目はどこだろうと、結局は「社会主義」という言葉だったということに気づきました。私はそういったような時代の中で、実態はどうあれ、「社会主義」という語に関心を持つ世代だったわけです。

しかし30代半ばくらいから現実にいろんな考えを知ることによって、昭和史というのは日本の歴史の中で必ず検証されるだろう、明治維新が昭和30年代の頃検証されていたように、いつか必ず検証されるだろうと。そのときに演繹的な日本軍国主義が中国へ侵略したという分析だけでいいのだろうか、侵略するという兵士の考えはどこにあるのだろうか、命じた司令官は何を考えていたのだろうか、というようなことを具体的に検証しないと、それは歴史が語り継ぐことにはならないと考えました。

そう思い立って、33、4歳のころですね、私は編集者だけの生活で、大学院に行って歴史学の基本的なフィールドを学んでいませんから、そういうことをやっぱりやらなければいけないなと思ひまして、独力でそれをやってみよう。どうせやるんなら

大きなテーマを、私たちの世代は先ほど言いましたように、戦前の軍国主義の仕組みを全然知りません。軍事的な言葉も知りません。そういうことを勉強するのも含めて大きなテーマに取り組んでみようと思いたったわけです。ひとつは東京裁判を調べてみようと思った。実証的に調べてみよう。2年6ヶ月続いたこの東京裁判を調べることによって、私たちは次の世代としてこれをどう理解すべきかがわかると。史料をずいぶん読みました。議事録もありますし。ただ東京裁判そのものについて書かれた書物はあまりないんですね、2、3冊程度です。議事録を読んでだんだんわかってきたことは、これは一人でやる仕事ではない、言語も最低3つ知らなければいけない、個人じゃやれないということに気づいて、では東條英機という人物を調べてみよう、東條英機はいうまでもなく日本軍国主義の最大の罪過をなした人（今もそうは思っていますけれども）、そういうふうに語られてきました。それを実態的に調べてみようじゃないか、と思い立って昭和49年から5、6年かけて取材調査に没頭し、昭和54年12月と55年1月に上下巻で出しました。

## 2.1 『東條英機と天皇の時代』（昭和50年代初め）

私は、まず最初の2年間は基礎的なことを全部調べました（将校の集まりである偕行社がわかるまで随分時間が長かったのですが）。いろんな名簿があります。その名簿の該当者に片っ端から手紙を書きました。たとえば、朝日新聞だ、NHKだって電話すれば、「いいよ明日の3時においで」とか、「来週の火曜日に」と取材の約束はとれるのでしょけれど、私は手紙を出す、個人で在野で昭和史に興味を持っている1人ですと。あなたの発言が聞きたいということで手紙を片っ端から出しました。名無しの権兵衛ですね。ところがですね、昭和50年前後を挟んで、まだ結構存命していて、旧軍人をはじめ関係者が意外に会ってくれるんですね。東條英機の側近たちにも何人も会いました。私はそういう人に会うときに、東條英機を弁護する気はないし、弁解するつもりもないけども、どんな人だったのか、何を考えていたのか、次の世代の者として具体的に知りたいんだ、ということで話を聞いて歩いたんですね。

その取材に平行して、私は当時杉並区に住んでいたのですが、国会図書館まで定期を買って毎日行って、昭和史に関する本を全部読みました。昭和史に関して、昭和47、8年までに書かれた本は大体全部読みつくして、戦前に刊行された書も読まなければいけないのは全部読んで、頭の中でだいたいわかってきた。当時の政治・軍事のシステムはこういうふうな形になっているのか、たとえば、東條英機については3冊、本が書かれていました。一番いいのは、ロバート・ビューターというアメリカ人が書いた本ですけど、時事通信から翻訳されている本で、昭和36年に出ている本です。あとは昔の新聞記者などが書いた本が、昭和30、40年代に出ています。いずれにしろ実証的というよりもむしろ、単なる描写で書いているだけなんですね。私はその2年間で国

国会図書館でやみくもに本を読むということを通じて、なるほどと、こういうふうな私たちで国会図書館に史料が整理されているのかと、本というのはこういうふうに整理されているのかというのがわかりました。同時に、たとえば東條英機について語ること、あるいは日本の軍国主義について語るにはどういう本があって、どういうことが書かれているかということがだいたい頭に入ったんですね。

取材していると広がりも出てきました。その中で私は主に当事者の意見を聞くんですが、当時は私も若いがゆえに証言について裏づけを取ることがなかなかできなかった。「これ本当のこと言ってるのかな」と思うこと随分ありました。今は、裏づけをとる前に、この人は本当のことを言っているか嘘を言っているかというのは、だいたいわかりますね。たとえば、「私は当時少佐だったんですけど」なんて言って軍人の話をする。少佐であるということは、今だと何歳でどういう経歴をもっているか、大まかなことはわかるんですね。それから外れているのにそういうことを言うのは、「あ、これは嘘を言っているな」とわかりますね。つまりそういう尺度というものがだんだんわかってきた。そういうことが東條についての6年くらいの取材を通じて身につけてきたんですが、問題は史料なんですね。

史料は、防衛庁戦史部にも行って、国会図書館でもいろいろ調べました。東條英機に関する史料というのはあまりないということに気づきました。それで、秘書官の赤松貞雄氏のところへ行って話をすると、「君、じゃあ、こういう史料があるんだ」といってコピーを見せてくれた。それは業務日誌とは別にですね、東條に3人の秘書官がついておりましたが（海軍、内務省、陸軍とそれぞれひとりずつ来て3人についているんですね）、彼らが業務日誌とは別に、個人で3人でまわしながら当番の日に書いている日記がある。それは「秘書官日誌」という名称になっているんですけども、コピーを見せてくれました。夕食を食べながら東條が何を話したかということが書いてある。私はそれを読みながらですね、この指導者の政治感覚はまったくひどいものだと思いました。つまりどういうことかって言いますと、ここから東條の悪口になりますけども、悪口というか、正確に日本の歴史の中に記録しておかなくてはいけないのですが、東條の発言の中にですね、政治家としての感覚、歴史感覚、あるいはどうしてこの戦争を指導していくかという明確なプログラムが一切ないことがわかってくる。たとえば、その秘書官たちがそれを記録として残そうというよりも、東條さんはこんなに苦労しているんだ、これだけ国民のことを思っているんだ、陛下のことを思っているんだということで書いた個人的な記録の、その日のメモ、それをみると実に国民は（国民というのは、ちょっと大仰な表現なんですけど）、愚かである、指導者というのは一步前に出て引っ張っていかなければいけない、だからいかに自分は苦労しているか、自分が偉いんじゃないんだ、天皇陛下のお志を伝えるという役なんだ、そういったことがいくつも書かれている。その史料を「赤松さん、悪いけど僕この史

料を書きたいんだけど貸して下さい」というと、初めは渋っていましたが、「このまま書くのか」と。「いや、これ歴史的史料じゃないでしょうか。」「ところがだな、これももう防衛庁の戦史部に入っているんだよ。防衛庁の戦史部に入っていて、このコピーを君に貸すとなると関係者の了解を取らなければいけない」と言う。「そりゃ、どういわけなんですか」と言う、「コピーを持っているけど自分の手をはなれているということだ」と。「でもあなたの個人のものじゃないですか。」と説得して、私は借り出してコピーをとりました。それは評伝の中にも使ったんですが、特別に苦情はありませんでした。そういった形の史料というのが、いくつか私の手元にも残っているものがある。

あるいは、東條が関東軍の参謀長をしていたときの副官、泉可畏翁という軍人ですが、戦後は熊本に住んでいましたが、その人は岡村寧次や石原莞爾、関東軍の参謀あるいは副参謀長の人達、7、8名に仕えた人なんです。私が彼を訪ねていったのを機に、「回想録を書いてあげる、あなたに書いてあげる」と言って、私に40枚くらいの回想録を書いてくれました。「これはどっかに寄贈していいんですか」と言う、「君にだけ書いたんだ、使っていいよ」と。それを読むと、たとえば東條と石原というのがいかに仲が悪かったか、いろんな具体的なケースで書いてある。そういった形の史料も入手し、さらに赤松氏の紹介などで、東條の日米外交関係の主務者たち、陸軍省の軍務局の政治将校たちが個人的につけている日記等も見せてもらうこともできました。防衛庁戦史部に入っているのもあるし、入っていないのもあるのですが。

そういった史料を使いながら、私は東條英機という人を書いたんですけども、とにかく上下巻を出しました。ちょっと話はそれますが、最初に取材に来たのはドイツの通信社の記者だったんですね。「君は戦争を知らない世代だろう、ドイツで君と同じ年齢の人間がヒットラーの伝記を書くなんてこと許されない、ありえない、君は東條英機の伝記を書くことは怖くなかったか。」と聞かれました。ドイツの私と同年代のものがヒットラーの伝記を書こうと全く思わないということを前提に聞くんですね。「私は別に怖いと思わなかった。具体的にどんなことをしたのかを知ろうと思った。私はいろいろ史料も手に入れて調べたけれども、もともと戦後民主主義をわかまえているから好きではなかったけども、なおのこと好きではないという感じは持ちました。」というような話はしたんですね。ただ、ドイツの通信社の記者が、ドイツでどのくらい配信したのか知りません。フランスにも配信したらしい。その後フランスの記者も来ましたので。

東條英機を調べている昭和50年代の初めに、いろんな人に話を聞きに行ったときすぐびっくりしたのは、たとえば三宅正一という当時社会党で衆議院の副議長をしていた政党人がいます。彼は戦時下の大政翼賛会の議会で、反東條のグループを作っていた。護国同志会というのがあるんですが、その一員でした。その話を聞きたいと

思ったんです。そうすると、メモもあるよと言っていました、見せてくれなかった。たぶん今の立場と違うからということなんでしょうが、それはともかくとして、彼は私に激怒しましたね、「なんでそんなやつの評伝書くんだ、くだらないことに時間使うな、君らのやることはもっとある。」「東條のことを調べて何の得になるんだ。」と徹底的にしかられましたね。それで、社会党関係のそういった人たち、戦時下の議会には随分いましたからね、そういった人たちも紹介してくれることになっていたんですが、もちろん一部紹介してくれましたけど、とにかく無駄なことをするなということと言われる。あるいは、出版社の人間と話していると、「へえ、保阪さん右翼なの」と言われる。この右翼なのというような表現が、日本の戦後の歴史を見るときのひとつの尺度だったと思いますね。

私はそういったなかでとにかく客観的に書くという姿勢で著したんですが、そのとき集めた史料というのは、日記を含めて結構あったんです。それをどうしたか、終わったら紙袋に詰めこんで自分の書庫においておくという形です。全く私は史料をどうしていいかわからないし、国会図書館の憲政資料室の人とは仲良くなりまして（今でもお付き合いしてるんですが）、その人のところに行ったら、「それは貴重なものもあるから、うちでも引きとっていいよ」と言うから、僕は「それは史料を持っている人の許可を得ないといけないし、史料にも著作権があるんじゃないだろうか。」と。「それはもちろんそういう権利はあるんだけど。それはでも公開するかしないかという基準は特別にないと思うがね。」なんて言われましたけど。一応私はそういうところに入れないで私の手元に持っていました。そういう史料は取材等でかなりの量が集まってきたんですね。

## 2.2 『昭和陸軍の研究』（昭和60年代から平成の初め）

私は東條英機の評伝を書いたあと、昭和60年代から平成の初めにかけて朝日新聞の『月刊 ASAHI』という雑誌がありまして、そこに「昭和陸軍の研究」というタイトルで連載を始めました。それは昭和陸軍の軍人たち、それまでも何人も会っている話を聞いて取材したりしたんですが、さらにこのときに多くの軍人や兵士に会ったんです。その時もいろんな史料が集まってきました。多様な史料が集まりすぎて、私自身が史料をむしろ知らない、史料の重要性を知らないというケースもありました。たとえば、明治・大正期に藤井実という外交官がいました。吉田茂の世代とほぼ同じなんですが、これは世界的に有名な人です。外交官としては昭和4年に外務省を離れて、財団法人の日米協会などの役員をやった人です。この人は第一高等学校の生徒だった折りに、運動会で（一高の運動会は明治時代には相当大きなイベントだったんですね）、その藤井が100mを10秒3という記録をストップウォッチで出した。世界記録に匹敵する記録だといわれた。それで世界に打電された、藤井という日本にすごい選手

がいると。イギリスの競馬に「ミノル」という名前が入っているのが今もいるんだそうです。そのときの藤井実の名前をとったといわれているんだそうですけど。ストップウォッチは当時は3人で計るんですが、どうも一高は1人で計ったらしいんです。測り間違いだったようです。世界記録にするかどうかで大揉めになったのですが、しかしこの藤井実というのがともかく有名になった、日本にそういう速いのがいると。その後、彼は外交官になってイギリスにも行くんですけど、その人のご子息に日英関係の話を聞きたいといって話を聞いたときに、こういう史料があるよと見せてくれました。彼は日英関係が険悪になっていくとき、昭和14年ごろですね、ひそかにイギリスの駐日大使館員達と接触して、どういう形にすれば日本と友好関係が維持できるだろうかと密かに打診する、そのことを平沼内閣、昭和14年ですね、平沼内閣に報告書を書いていますね。建設的な政策の献策をしている、こういうふうにするべきであると。その経緯を書いた史料なんです。私はそうですかと、平沼内閣のときにこういう案を出した元外交官がいたんですかと、それは「へえ」と思った程度でした。それから1年か2年して、東大の政治学のある先生からあなたのところにもそういう史料が行っているはずだけど、その史料というのを私にも見せてくれないだろうかという連絡があった。正直なところ、それはпойとおいてあるのであわてて探しましたら、あったんですけど。もちろん構いませんと、お貸しいたしますのでどうぞ自由にお使いくださいといいましたら、この史料というのは極めて重要な意味があって、平沼内閣のもとの日英関係において、こういった動きがあるということが、私の研究にとってきわめて大事なんだと言っておられました（ちょうどドイツとソ連が不可侵条約を結んで、平沼内閣はわけわからなくなって辞めちゃうんですけど）。

そういうようなことがほかにもいくつかあったんですが、私の机の上に、あるいはどっかになにげなくおいてある、昭和陸軍の研究の時にはいろんな人に会っているんな日記も見せてもらったし、私はなるべく書いて私に書簡の形でくれませんか、できるだけ書いてもらうようにした。そういうので随分集めました。そういう中にはですね、ちょうどロシアの状況がああいう中で、ロシアにも行って旧ソ連の公文書館、あるいはアメリカの公文書館等にも行って史料を見てきたんです。そういう中で私が見た史料というのは、ソビエトの場合、アメリカの場合も、極めてシステムティックに整理されている、同時にアメリカの場合にはびっくりしましたけれども、当時ナショナル・レコードセンターというのがアーカイブとは別にメリーランド州にあったのですが、それはアメリカが占領した国々の史料類を一括して記録として残してある、そこへ日本の占領下の史料があるんですね。そこには目録があるんで見てこれを見たいといって申しでると出してくれるんですが、だいたい「SECRET」とあるんです。しかしもう期限切れてるから構わないよと言ってそのマークを消して次々見せてくれる。そこでびっくりしたのは、たとえば浅草のある何丁目かの町内会に出席している

人の絵札というんですか、名前の札、そんなのも持ってきている。それから町内会の小さな黒板みたいなものも持ってきている。とにかく根こそぎ持ってきているんですね。さらに米の通帳まで持ってきている。あるいはマッカーサーに宛てた手紙なんていうのもごそっと出てくる。占領初期には興奮してマッカーサーに手紙を書いた人がずいぶんいるんですね。僕はそういうことをしない方がいいなというのは、あえて付け加えたいのですが、時間が経って次の世代として行って読んでみて、なんてこの人は哀しい人だと思うケースが多かったですね。たとえば何々県何々市、私の町内に住んでいる誰々某は、戦争中こういった言論を吐いてアメリカを敵視してどうのこうなので、この人をマッカーサーさん是非罰して下さいとか、そんな手紙がある。こういった手紙を出した人ってのは、何十年たとうとアメリカに残っているとは思わないでしょうが、あんまりそういうのは残さない方がいいなと思いましたね。しかし、そういった史料そのものが日本人の心理を現すんだと思いますけど。

とにかくいろんな史料を見てくることによって、私はロシアもアメリカもそれぞれ大事な史料は見せてはいないと、そのときはわからなかったんですけど、見せてはいないとのちにわかりました。ソ連は1945年8月9日に対日宣戦布告をして新京へ入ってきます。これは正確かどうかは別にして、極東ソ連軍はすぐに新京の関東軍司令部に入って史料を押さえて、貨車28台に積んでモスクワに持っていったというのです。確かに日本で関東軍の最後のことについて、たとえば戦後のいろんな戦史の中でも極端に記述が少ないんですね。これは史料が無いからなんです。ソ連に持って行かれたためだと思いますけど。そういったような史料は、ソ連でどうなっているんだろうかということで、社会主義体制が崩壊したときにモスクワに行ったんですけども、その全体像は明確にはわからなかった。でもただそのとき、味合わされたんですが、日本語のできるソ連の研究者たちが、岡田嘉子のこっちへ来てからの史料があるよとか、野坂参三のあるよと、とにかく日本のメディアにばら売りする。どここの社は何ルーブルで買うと言っているよと。それは私はソ連のアーカイブの人間が悪いというよりも、私たちの国の史料感覚を全く見透かして言っているんだなと気づきました。たとえばアメリカのエール大学のようにソ連の共産党大会の第一回から第七十何回までの議事録を全部買って行く。そしてそれを今研究していて、多分その研究書が出るのは2030年ごろだと言われています。そのときに20世紀の共産党の総本山の議事録が分析されて一般の人も知るができるわけですね。世の中に出されてくるのですから。そういうタイムスケジュールの長い感じで史料に取り組んでいく、私たちの国はどれもそういうのに欠けるんじゃないかなという実感は私は持ちました。同時にそれは私自身が、史料をポイと机のどっかに置いている、あれどこいったっけなど言っているのと、ほとんど同じことだとも実感しています。私は史料について極めて無原則、同時にそしてその重要性というのは自分の執筆の材料でしかないという感じで使ってい



る、そのことについて私はしだいにおかしいと思うようになりました。

それでこういった史料をどうするんだろう、僕がいなくなったらどうするんだろうと思って、出版社や新聞社と付き合いが多いので、あなたのところで史料室はどうなっているの、というような話をすると、いやほとんどの会社で整理されていない。「僕と一緒にやったときのあの史料どうしているの」と聞くと、「どこいったっけな」と彼が机の中をごそごそ探している、「史料室に置いてるんじゃないの」というと、「史料室に置いたってどうせ同じですよ」とみんな個人が持っている。つまり、メディアの側、ジャーナリズムの側の一員として言うのはちょっとつらいのですが、メディアの側の史料室や研究室は実際的には収集・管理がうまく機能していない。それは全く、材料として使ってそれで終わりというのが現実だからと思います。メディアの側が、日本の史料管理がどうのとか、国会図書館の史料管理がどうのとか、国立公文書館がどうのとか、外交史料館のがどうのとか、具体的な指摘をあまりしませんね。建設的な批判というものもない。それは日本のメディアの中に史料についての考え方が、基本的なフォームができてないからだ、そういうことなんだと思いますね（それは私もそうだということですけども）。だから至る所で史料が散逸し、それが保存、管理されていない。

もちろん私たちのこういったような現状というのは、国全体の考え方の反映かもしれない。たとえば、昭和20年8月14、15日です。大本営から発せられた命令の中に、全ての史料や文書を焼却せよ、行政関係の資料を焼却せよという通達が流れています。政府もまた閣議を開いて焼却することを決定しています。いろんな記録を読むと、あるいは日記を読むと出てきますけども、8月14日から15日にかけて、どこの地域の官庁からも煙が上がっている、全部史料を燃やしていたんですね。その史料を燃やすというところに私たちの国の何かが欠落している。いろんな言い方ができますが、私は基本的には政治・軍事の当事者たちが、自分の時代しか見ていない、ポツダム宣言の実施で我々は裁かれる、軍事裁判が行われる、それを防ぐために、史料を残さないためにとそれで燃やしている。これは明らかに自分の時代しか考えていない、歴史のことを考えていないということですね。もっと言うと、あの3年8ヵ月つづいた戦争の中で、どうして「本土決戦」という言葉が呼号されて、「一億総特攻」という言葉が国策として、ほとんどそれが前面に出て主張されたのか。国策として「一億総特攻」という言葉を平気で使うところに、何かが欠落している。私はこう考えるべきだと思うのです。確かにあの当時の軍事指導者・政治指導者にあの時代を指導する、指揮する権利は与えられていた。しかし長い目で見ると、あなたの父親や祖父やもっと代々、それから子供や孫のその存亡までも決定する権利は託されてはいない、歴史からの権力は付与されていない、そのことの怖さを自覚していないから、だから史料を燃やす。こう考えてくると私たちが史料に対してかなりあいまいなのは、歴史に対する責任感

の欠如ではないか、責任感の欠如が史料というものを粗雑に、それから軽視したり、あるいはその使い方に極めて恣意的な感情が働いているのじゃないか、という感じがします。

### 2.3 『蒋介石』(平成10年前後)

なぜ日本は中国へ戦争を挑んだのだろうか。これはずっと私自身のテーマなんですね。辛亥革命が起こるまでに1800年代の終わりから1900年代の初めにかけて、中国と日本との間にはある種の交流があります。それは辛亥革命に至るまでの孫文と協力した日本人志士、宮崎滔天と山田純三郎、山田良政といったような人達を見ているとわかります。彼らの志はどうしてつぶれたのか、というのがずっと私のテーマなんです。当然ながら日中戦争についての史料を私は調べたいし、調べてはいるんです。日中戦争というのは、抗日8年の戦争と中国側は言いますが、その戦争のことを調べるには、もちろん共産党についても調べなければいけません、台北に行って国民党の史料室を見なければいけません。実際に台北に行って国民党の史料室を見せてもらいました。国民党が南京政府の史料すべてを持ってきたかどうかかわからないけれども、蒋介石の発した命令、そして行政院の命令、それからアメリカとの連携などの条約等の史料は残っていますね。そういうなかには、日本軍国主義に対してどういった戦いをしたのかという戦闘記録、そういうものもあります。しかし、それはどの程度あるのか。蒋介石が重慶、成都から台北に引いていくときに、どれだけ持ってきたのか。それがわからないから、ある史料全部が正しいのか、それが全部政策の決定の史料なのかちょっとわからない。しかし私は、抗日の8年戦争を戦った国民党がどういう考えでいたのかということについては、蒋介石の側近達の話聞いてある程度わかりました。そして『蒋介石』という書を書きました。それを書いて国民党と日本の戦闘についてはわかるんだけど、共産党はどうなったんだろうと、この5、6年北京の社会科学院に行って中国の研究者達に史料についてどうなのかという話を聞いています。

今はまだ、共産党の史料というのを見たわけではないし、そんなにあるわけではないように思いますけど、むろんいくつかの貴重な史料はあると思います。そういうものを見て書いていかなければならないと思います。同時に中国の国民党支配下にいた中国人、共産党支配下にいた中国人が日本軍国主義をどういうふうに見ていたか、そういう証言はかなり聞いたのですが、そういう証言を私なりにきちんと残していかなければならないと思う。

いま私はしばしば言うんですが、記憶を父として記録を母として教訓を生み出すと、そういう時代に入っているのだと思うんですが、教訓を生み出すための作業をやらなければいけないと思います。それはもちろん、中国との戦争だけではなくて、ロシアともアメリカともイギリスとの関係についても調べなければなりません。さしあたり

私は中国との関係を調べていますが、まだまだ調べなければいけないものがあって、人生は一回しかないからできないのは残念なんです、できればルーズヴェルトの評伝を日本人の手で書く、チャーチルの評伝を書くという時代が来てほしい。私自身はイギリス人からいろいろ聞いてみたら、まずチャーチルに関する毀誉褒貶の激しさに驚いたんですが、もしチャーチルの評伝を書くなら、読まなきゃならない史料が最低100冊はあるんですけども、そんなことをやって書くということはやはりできませんね。早くから志を立てて語学の勉強をしていけば別です。ただたどしく読んでではダメなんです、流し読みできるようにならなきゃ無理なんです。日本人がチャーチルの評伝書いた、スターリンの評伝を書いた、しかもソ連に行って調べて書いた、ルーズヴェルトの評伝を書いた、という時代が作れなかったこと、それを僕自身は悔しいと思っています。次の世代がそういう作業に取り組んでほしいと思います。それこそがインターナショナルである、よくいうグローバリズムの中で日本を見るということになるんじゃないかと思う。

私の知る限り、イギリスもそうですけども、アメリカやロシアを始めとして各国には史料はかなりあります。むしろ私たちの側に史料が整理されていない、という現実を見て絶望しがちなんですが、よその国へ行くとよその国の史料はそろっている代わりに、いまのところ、重要な文書はまだ出てないという感じもします。なぜシベリア抑留が行なわれたのか、スターリンがどういう命令を最終的に極東ソ連軍のワシレフスキーに下したのか。それが出てませんね。スターリンは日本の占領下のプログラムをどのように描いていたのか。出ていませんね。アメリカのルーズヴェルト大統領は昭和15、6、7年頃、日本を分析するときに誰の意見を最も重視して、そしてその意見にどのようなコメントをつけていたか。そういった史料はわかりませんね。おおもとのことはだいぶわかってきているんですよ。しかし、まだまだ史料を精査していかなければいけない面がある。そういう史料は必ず存在すると思います。是非若い人はそういった史料を見て分析していくことが大事だと受け止めてほしい。結局、私たちの国の、先ほど言いましたように、史料に対してずさんだという姿勢は、歴史に対して失礼な態度だと考えなければならないと思うのです。

### 3. 史料の管理について

若干これから自慢話をさせていただきたいんですが、私は著述家として史料を集めているうちに矛盾を感じるようになりました。私が集めてきた史料は、書庫にあるいは借りたマンションに、あるいはどっか倉庫にと置いてあるだけ。昭和史を在野で研究している人達と会うんですけど、史料はどうしているかとか、あの人死んだけどあの人史料はどうなったの、そのままらしいよ、結局は有耶無耶になっているという話になる。結局こういうことが無限に繰り返される。私は史料を整理していないじゃ

ないかとあちこち批判しているけど、自分がどうするかが明確でない、というふうにあるときに思い立ちました。私はそのときに、よし自分でやれることだけをやろうと。ということで、『昭和史講座』という誌を自分で出すことにしました。今機器類が便利ですから、家内と2人で作っているのですが、フロッピー1枚に原稿を打ち込んで、紙も印刷も安いですからね、安いっていうのも変ですけど、そんな無茶苦茶金がかかるわけではない。しかもこの誌はそれを営業に使うわけではない、ただただ残す、興味がある人に興味があるといえば、言葉は悪いけど進呈する、という方法です。

戦後、中国の撫順で軍事法廷で裁かれた日本将校がいるんですけど、その人が起訴状と判決文を全部日本語訳して持っていた。それを私は全部もらったので、もったいないと思って、『昭和史講座』に全文何回かに分けて収録しました。そしたら、ある市民団体の人がそれを売ってくれないかと、私は商売じゃないから売らない、あげますよと、あげますというのは変ですけど、まあどうぞと。そしたら100部くらい送ってくれというんです。ちょっと待てと、100部別途につくって送るっていうと金かかるんですね。そのとき僕は商売にする気はないけれども、こういった形で利用されるのも嫌だと思いました。そのときは提供したんですけども、こういうやり方ではだめだと思った。政治的に、思想的にというのではなく、史料に関心がある、どうしても語っていききたい、昭和史について語っていききたいという人のために、そういうものを出そうという方向に変えました。

市民講座で私はいくつかのところ、たとえば朝日カルチャーセンターなどで講師をつづけているのですが、今年で12年になります。月2回ですね。毎回50人余の人が受けるんですが、そういう人たちの中にまた小さな勉強会ができて、そういったところをコアにしながら、『昭和史講座』をこれまで12回ほど出してきたんです。しかし3年ほど前、腎臓に悪性腫瘍があるとわかって、それで腎臓をひとつ取ったのですが、別に転移してなくて今はなんでもないんですけど。それで刊行がちょっと止まっているんです。最近体調が良くなったんで、また出して行こうと作業を進めています。

私自身の史料を残すという、私自身の思いつきという一点でやってるだけなんです。どんな本かというので持って来ました。たとえば第5号には、史料としては「旧満州国皇帝溥儀のソ連共産党への入党要請文」、これは中国で入手したんですけども。溥儀がスターリンに宛てて、溥儀はご存知のように機を見るに敏なタイプですので、スターリンに宛てて入党申込書を書いたんですね。そしたらスターリンから返事が来まして、我々の国家はあなたのような階級を倒すために存在するのです、だからあなたは入党できませんというんですけどね。その入党要請文はなかなか面白い。また「昭和20年吉田茂邸に侵入した陸軍軍曹の手記」、中野学校出身者のスパイの書き残した手記とか、「シベリア抑留裁判の報告」、「参謀本部戦争指導班の機密文書」、参謀本部の戦争指導班が日中戦争で中国を制圧したときどんな地方政権を作るかについての起

案するまでの内部文書が残っている、それは私が入手したんですが、そういうものも紹介しています。

たとえば、第10号ではこの「日中戦争下の参謀本部戦争指導班の極秘文書」、それからソ連の艦隊参謀イサコフが東京裁判に提出したロシア側の文書、つまり日本が犯した中立条約違反の事項を列挙しているのですね。さらに「第53軍の対上陸作戦準備」、第53軍というのは本土決戦で相模湾を担当した軍ですね。その司令官が書き残していた相模湾にどのような築城をするか、どのような陣をしくか、これは昭和20年の5、6月頃のことなんですけれども。その計画は明らかに硫黄島が随分参考になっている、参考になっているのだけど、しかし岩盤が違うんですね。こっちは砂で作れないということもわかります。

そういった史料を自分の手の届く範囲で残していこう。きざな言い方だけれど関心のない人には一切見せないというか、配布しない。関心のある人だけでいい。そういう方針で自分でとにかく出す。実はここまで自分なりにいろいろ表紙もデザイナーにも考えてもらったりしてやっているんですが、そうすると出版社が私のところで出さないかと言ってくる。それはお断りしているんです。なぜかというと、ひとたび商業ベースに乗ったら、売れるように見出しがつけられて、売れるように史料が処理される。もちろん私は史料だけではなくて、どうしても書き残したいという人の証言を残していますし、あるいは私自身が取材してきた人の中の証言で残しておかなきゃいけないというものを残していますから。だから別にそれは腐るものではないし、雑誌とは違う。たとえばこの第10号の場合は、東條英機秘書官の見た軍事指導者論、赤松貞雄が東條英機をどう見ていたかというインタビューを載せています。それから石原莞爾の秘書が見た反東條論とかそういったのを載せるんですけども。こういったやり方でどこにも頼らないで自分でやる以外にないというのが、私なりの三十何年やってきたことの結論なんですね。自分でやる以外にない。きれい事を言えば、身銭を切って自分でやる以外にない。自分で身銭を切ってやる分には誰にも何も言われる筋合いはないし、それで好きなようにやれますからね。人を雇うとかそんなでもない。夫婦でやってればいいわけですから。そういうことでやろうというふうになりました。多分そういう無理がたたって体調を崩したのかなと思うんですけども、やり始めたら退くわけにはいかない。決して自慢げに言うんではないんですが、自分でやんなきゃいけないということが結論かなと思います。こういったことを私は（私が死ねば自動的にこの雑誌は終わり、それだけに何号で終わるかわかりません）、この3年ほどちょっと体調が悪いので止めてますけど、どうしても形をつくっていきたいと思っています。

こういった史料を残すことで、たとえば私も大学で教えた体験があるのですが、学生の中でどうしても戦争について書きたいことがあれば書いて来なさいということをしたときに、ある女子学生が先生こういった考え方はおかしいですかとってレポー

トを持ってきたことがあるんです。それは、うちのおじいさんは戦争の話をする、あんな戦争などすべきではなかったと言うけれど、どうして戦争前にそんなことがわかんなかったんですか、どうしてそういう当たり前のことがわかんなかったんですか、私はそれが疑問でしょうがないという内容です。そしてたまたまこれを載せたことがある。そうしたら何人が読んでくれている戦争体験者がいるんですけど、彼らの間で論争が起こった。あの時はそんな時代じゃないんだ、戦争に行くのが嫌だとか言ったら大変なんだ、憲兵隊に引っ張られてどうだっていう反論ですね。そうしたらその女子学生がたった一言いいましたね。「だからどうなんですか。私の疑問の答にならないと思いますが」と。21、2歳の女子学生と70代の方（大学の先生もいたんですが）がやりとりしたときに、この女子学生が「そんなこと聞いているんじゃない、私だってわかります、治安維持法があったってわかります、それなのに何もしなかったというのはなぜなんですか、それは自分が死ぬのが怖いから、警察が怖いから。じゃあ尋ねますけど、ヨーロッパの地下運動やってる人達で日常的に死んでいった人はいっぱいいるじゃないですか、どうしてそういうようなことにならなかったんですか。」と聞いたんですね。私はその意見について、これは基本的な問題を含んでいると思います。昭和の史料を読む次の世代というのは、多分こういう世代になってきているんだ、こういう見方をするんだ、だから逆に言うと史料というものは、残すと同時に残した世代が注釈をつけていかなければならない、史料の意味を説明していかなければいけない、その史料の意味を説明することをサボタージュしていると、史料は弁明のツールになってしまうとも思った。史料を生かすとはどういうことか。そのことを常に考えなければならぬ。私は学生を納得させるために、一例として桐生悠々の『他山の石』の伏字を見せる。伏字を見るとどういう時代だったかというのがすぐにわかりますね。そういう中で発言することはどれだけの意味を持つか、ということを説明して、ある時代の怖さを教える以外にないと思いますね。

#### 4. 結論として

史料というのは確かに一人歩きする、同時に社会化します。その社会化した中で史料の読み方はさまざまに変わっていきます。それゆえに史料を主体的に、あるいはある時代の史料はきちんと正確に分析されなければならない。史料だけで一人歩きすることの怖さを感じます。私は、昭和50年代に2年ほど国会図書館に通いつめて史料を読んだときに、史料を残していくことが大事だと、そのときはあんまり思わなかった。しかし、のちにこの2年間の経験を思いだしてふたつのことに気づきました。

ひとつは、明治14年頃鍋島藩の下級武士だったと思われる人が、帝国陸軍を建軍するとき、一下級武士として意見があるという献策書のようなものを提出している。それは帝国図書館にどういうルートで入ったのかわからないけど、とにかく納められて

いたんですね。私はたまたまそれを見た。その中でその鍋島藩の下級武士が言っていることのひとつは、性病の怖さなんですね。軍というものがひとたび性病に兵士が冒されるとどんなに怖い。私はそれはなるほどと思って、日本の陸軍は性病に対してどんな処置をしていたのかというテーマがでますね。そういう研究も、史料を読むなかから知りました。

もうひとつは、中国との歴史の中で私が興味を持って、日清戦争に従軍した人達を2人ほど、昭和40年代終わり頃からの聞き書きの中で聞くことができた。いずれも百歳を越えていました。三重県の伊勢に住んでいる106歳のおじいさんのところに行って日清・日露の戦争について話を聞いたことがあります。彼は日記をつけていたんですね。旧制中学の数学の先生をしていた。それで彼は日清戦争の九連城の戦いの描写なんかを書き残している。さらに清国は日本と戦争をやっているときに爆弾を投下するわけですね。ところが、本来なら落下するや爆発してそこで何人が死ぬわけですけど、多くの爆弾は爆発しないでコロコロって転がっていく。なぜか。欧米の武器商人から火薬の入っていない、火薬を入れた爆弾ではなくて砂を入れた爆弾を買わされていたんですね。日本軍がそれに気づいたんです。清国の兵士もびっくりするわけです。爆発すると思っただらしないと、それで逃げていく。日本兵が追いかけていく、直撃を受けない限り絶対死にませんから。こういった記述を見ると、清国の腐敗というのは、欧米の武器商人にいいように手玉に取られていたということがわかりますね。そういったことが史料の持っている重要なところ。その老人は、日清・日露のふたつの戦争に参戦した体験からいって昭和に入ってから満州事変からの日本が中国に入っていく戦争は間違いであると考えました。では何をやるか。彼はそのときに小さな村の村長だったのですが、村長として在郷軍人会と一緒に旗を振って歩くのが嫌になってやめて、何をやるか。自分は数学の教師だったのだから日本人の優秀さというのを別なところで示したいと考えた。それで、フェルマーの定理というのがあるんですね。フェルマーの定理は、「 $X^n + Y^n = Z^n$ 」という数式は、「 $n \geq 3$ 」とするとき成り立たない、という定理です。ピエル・ド・フェルマーという17世紀のフランスの行政官で数学好きなんですが、彼が11の定理を残して死にましたが、そのうちのひとつです。次々とガウスやガロアが解いていきました。20世紀に残されていたのは、このフェルマーの定理、本当は解いてないから定理ではなく問題というべきなんですが、フェルマーの問題ですね、これが解けていなかった。これは1637年から何世紀にも渡って解けていないわけですからね、これに取りつかれた人は歴史上何人もいます。国会図書館に行くとそういう人物は日本にも何人もいます。私の会った老人も日本人の優秀さを示すために解こうとやって、フェルマーの定理に毎日挑み続けた。昭和48年のある新聞にそのおじいさんが解けたという記事があり、それで私は訪ねたのです。老人の日の記事ですね。その老人が前述のように日記をつけていた。それからフェルマーの定理の話も

聞いた。フェルマーの定理に取りつかれた人は、たとえば1907年にオランダの財閥の御曹司が取りつかれて、自分が死んだら自分の財産は全部解いた人にやると遺言を残した。国会図書館に行ってびっくりしたのは、自分こそフェルマーの定理を解いたと日本人の作成した数式が4、5通もあった。このフェルマーの定理を解いたというのは、世界各国からフランスのアカデミーの数学の専門家のところへ次々届くんです。何人もの数学の一流の人が集まって確認していくんですね。これだめ、これだめ、とって次々捨てていく。最近コンピューターで、不等式であるというのがわかったということが報じられてそういう動きに終止符が打たれた。

私は国会図書館の史料を読みながら、史料を通じて歴史とつながろうという人がやはり無限にいるんだということ、それは私たちもそうなんだ、いや私自身がそうなんだと実感しました。だから、史料は生き物である以上、自分が持った瞬間から社会化すること、共有化すること、そしてそれに説明をつけておくこと、そのうえで残していくこと、というのが大事だなと思います。それが私のひとまずの結論なんですが、そのために、私たちは史料というものを通じて、時代そのものではなくて、時代の底を流れている歴史の意思というもの、あるいは歴史的責任とか、歴史的自覚ということ意識しないといけない、私たちは単なるその時代の枠組みの中で踊るピエロのようなものであってはいけない、という感じがします。大まかに私の意図すること、言わんとするところは、史料というものを真摯に考えることで、そこを発端としながら、歴史の実像の一端が見えてくるということを結論とさせていただきたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。

(この文章は、平成19年5月13日(日)の春の特別展・講演会でお話いただいた速記録に、加筆・修正をいただいたものです。編者註)